

特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会

災害復興委員会

2024 年度 活動報告書

【特集】

話し合いを支援する・話し合いで支援する

～令和6年能登半島地震、ファシリテーションによる復興支援現場から

- ・七尾市情報共有会議 ————— 3
～ハイブリッド(被災地の支援者+全国からのオンライン参加者)で
議論が深まる環境を構築
- ・「能登町情報共有会議」の立ち上げと運営の伴走支援 ——— 5
～顔の見える関係づくりから、連携・協働を育むために
- ・石川県社会福祉協議会 ————— 6
～生活支援相談員同士で悩みや想いを共有
- ・志賀町 保健福祉課 ————— 6
～課題やニーズを聴き取り、専門家に繋げる支援

南相馬市災害ボランティアセンター連携会議を支援 ————— 7

～平時から備える、災害ボラセンの運営に向けて

各地で養成講座や練習会を実施

- ・災害復興・防災支援者のための「話し合う力」養成講座 ——— 8
- ・災害時の情報共有会議に活かす板書練習会 in 青森 ————— 9

Topics

- ・ネイチャーガイドの視点から見る場づくりとは ————— 10
～災害復興トークカフェを開催
- ・YesとNoのカードを使って、楽しみながら ————— 10
防災・備えを考えてみよう
～気軽に体験！ 防災対応カードゲーム「クロスロード」
- ・災害時の地域での話し合いを疑似体験 ————— 11
～各地の定例会で話題提供
- ・情報共有会議を可視化するという災害支援のカタチ ————— 11
～板書ボランティア練習会

2024 年度活動一覧 ————— 12



[特集]

話し合いを支援する・話し合いで支援する

～令和6年能登半島地震、ファシリテーションによる復興支援現場から

2023年度活動報告書においても多少扱いましたが、今回、あらためて特集記事として、令和6年1月1日に発生した能登半島地震の復興支援の全貌(七尾市、能登町、志賀町、石川県地域支え合いセンター)をお届けします。七尾市情報共有会議(いやさか会議)は、一般社団法人能登復興ネットワークからの依頼により、2月末から7月まで全10回の情報共有会議を支援しました。また、能登町情報共有会議の準備会は、能登町役場からの依頼により、関係者が集まる会議の場の設定、会議運営イメージ像、助言・相談・ふりかえり支援、伴走支援を行いました。さらに志賀町の健康福祉課の依頼により、3月～6月にまで7回現地入りし、庁内、避難所、支え合いセンター運営の相談や会議支援を行ってきました。七尾市、能登町、志賀町の3箇所の支援の日程を調整し、日本ファシリテーション協会(FAJ)の富山サロンメンバーの助けを借りて、基本2泊3日の行程で支援を行いました。また、石川県の社会福祉協議会からの依頼で12月には生活支援相談員向けのワークショップを行いました。

支援の依頼は、2月、3月が中心で、この時期は、被災者が防災後の避難所生活から、自宅に戻り、自宅の復旧や今後の生活の再建が始まったころ。被災の状況が一人一人異なり、ニーズもさまざまな中、行政や社協サービスとの間のアンマッチ、さらにそこを埋める役割のNPO等の支援団体の調整が求められる段階でした。各地の状況とプロセスをふまえて、ファシリテーションの視点で見えていきましょう。



災害の概要

令和6年1月1日16時10分に石川県能登地方でマグニチュード7.6(最大震度7)の地震が発生。この地震により、新潟県、富山県、石川県、福井県の35市11町1村に災害救助法が適用された。4県における人的被害は、死者549人、負傷者1935人。住家被害は16万棟を超えた(令和7年3月11日消防庁発表)。

ハイブリッド(被災地の支援者+全国からのオンライン参加者)で議論が深まる環境を構築

2024年元日に発生した能登半島地震を受けて、日本ファシリテーション協会(FAJ)災害復興委員会は、石川県七尾市における「七尾市情報共有会議(いやさか会議)」の運営支援を行いました。この情報共有会議は、七尾市内で活動する支援団体と、全国からオンラインで参画する団体・個人が定期的に集い、現地の最新状況や支援ニーズを共有し合うことを目的とした場です。会議は2024年2月末より隔週で開催され、FAJとしては、七尾市社会福祉協議会の七尾市災害ボラセン連携会議に引き継ぐまでの全10回を支援しました。

この会議は、「対面+オンライン」のハイブリッド形式によって実施されました。七尾市の会場には現地で活動する支援団体や関係者が集まり、同時に全国各地の支援団体やボランティア、行政関係者などがオンラインで参加する形で構成されており、物理的な距離を越えて多様な主体が情報を交換し、いかにして被災地に適切な支援を届けるかを話し合っていました。

災害復興委員会では、この会議の設計・運営支援に取り組みました。当初は通信環境の不安定さや機器の制約により、音声が届かない、発言が聞き取りにくいといった課題が頻発しました。しかし、回を重ねるごとに、マイクやスピーカーの配置を工夫し、Zoomの設定や進行台本を精緻化するなどの改善を加えることで、安定したハイブリッド運営の体制を整えることができました。こうした積み重ねによって、現地とオンラインの参加者が一体となって議論を深められる環境が構築されたのではないかと考えています。

支援体制については、災害復興委員会のメンバーだけではなく、全国にいる委員会サポーター、また被災地に近い富山サロンの有志にもご協力いただき、毎回異なるメンバーで5〜6名のチームを編成し、現地支援とオンライン支援に分かれて、それぞれの役割を担いました。具体的には、現地での会場設営・会議デザイン、進行、議論の見える化、オン



会場では、参加者もファシリテーターもパソコンを通してオンライン参加者ともコミュニケーションがとれるよう工夫した

ラインでのZoom操作、記録など、会議運営を多面的にサポートしました。

現地支援メンバーは、当日14時頃に金沢駅に集合し、レンタカーで七尾市に移動。16時頃から能登復興ネットワーク事務所での打ち合わせを行い、その後会場に入り会場設営やオンライン接続テストを実施し、19時からの会議に備えました。

また、会議の場では、ホワイトボードや模造紙を用いて現地の議論を可視化し、それと並行してオンライン上でもリアルタイムに発言をテキスト化。Googleドキュメント等を活用し、現地とオンラインの両方から議論の流れが把握できるよう工夫しました。これにより、参加者間の認識の共有が進むと同時に、会議に参加できなかった方々に対してもスピーディーな情報共有につながりました。

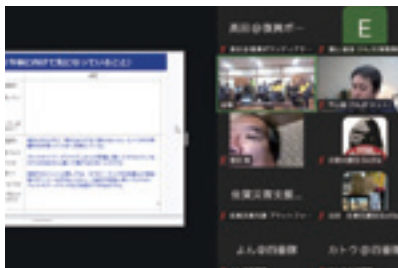
災害復興委員会では、被災地での情報共有会議を支援する意義として、単に「情報を集める」ことではなく、「支援のもれ・むら」を防ぐこと、そして現地で活動する団体同士の連携・協働を促すことに考えています。この会議を通じて、各団体がそれぞれの活動状況や課題を共有し合い、役割分担や協力体制を柔軟に構築することが可能となります。また、これらの取り組みの先にあるのは、被災された住民の方々が「少しでも先が見通せるようになる」ことです。それこそが地域の復旧・復興を加速させる大きな一歩であると私たちは信じています。

今後、災害復興委員会では、ファシリテーションの専門性を生かしながら被災地および被災者に寄り添った支援のカタチを模索していきます。(FAJ災害復興委員会、平山猛)

今後、災害復興委員会では、ファシリテーションの専門性を生かしながら被災地および被災者に寄り添った支援のカタチを模索していきます。(FAJ災害復興委員会、平山猛)



会場では模造紙で発言を「見える化」した



オンラインでの参加の様子

主催者の声から

被災地における「つなぐ力」

一般社団法人能登復興ネットワーク

森山 奈美



能登半島地震直後、避難所運営に追われる地域住民たちが疲弊するなか、地域を再建していくには「安心して話し合える場」が必要と感じました。情報共有の必要性は高まる一方、地域外から多くの支援団体が入ってくることで、現場では混乱やすれ違いも生まれていました。そんな中、私たちは日本ファシリテーション協会 (FAJ) 災害復興委員会に支援を依頼しました。

第1回目の七尾市情報共有会議は、地元のファシリテーターで運営をしましたが、現場の仕事に忙殺されて、第2回目以降がなかなか開けずにいたところ、FAJの支援によって定期的な開催にこぎつけることができました。会議では毎回の議事の可視化や前回からの課題の継続的なフォロー、何より話しやすい場づくりが徹底されていました。とくに印象的だったのは、オンラインと現地をつなぐハイブリッド形式という困難な状況下でも、FAJの皆さんが一体感を持って会議を支えてくれたことです。

被災地域での情報共有会議は、何かを決める場ではなく、様々な立場の人たちが「見えている世界」を持ち寄る場です。行政は定量的な情報、社協は定性的な人のつながり、NPOは現場感に基づく声。それぞれの視点を橋渡して

きるのが、外部のファシリテーターの役割であり、まさに「中立性」が必要とされる理由だと実感しました。地元の人間だからこそ言いづらいことも、外部ファシリテーターが丁寧にすくい上げてくれる。だからこそ、対立しがちな局面でも冷静な進行が可能になりました。

一方で、私は地元の間支援組織としての立場と市民としての想いの狭間で、深い葛藤も抱えていました。情報共有会議で見えてきた課題を、次回までに解決できなかったことへの悔しさ。「自分をもっと調整できていれば」と何度も感じました。また、支援に入ってくださった外部の方々に対して、「七尾市が受け入れる土壌を整えられずに申し訳ない」と感じることも少なくありませんでした。

それでも、FAJの皆さんが常に伴走してくれたおかげで、多くの支援者となつがり、仲間が増えました。今後の復興やまちづくりにおいて、市民の「主体性」と、外部支援を受け入れる「受援力」の両輪が必要であることを、改めて強く感じています。そしてその間をつなぐ存在として、ファシリテーターの力は、これからの災害復興に欠かせないと確信しています。

FAJ会員の声から

七尾市情報共有会議「いやさか会議」に参加して

日本ファシリテーション協会 富山サロン 田村 雅人

災害復興委員会から富山サロン運営委員に七尾市情報共有会議「いやさか会議」支援の要請があり、当日都合のつくメンバーは会場でのグラフィック担当や準備・後片付けのお手伝いをしたり、オンライン参加者の発言を記録したりしました。私もその一人でした。この会議をブラッシュアップするために行っていた事前打合せや振返りにも参加し、うまくいった点や問題点を共有したり次回の役割分担を確認したりし、その内容を次の参加メンバーに引継ぎま

す。富山サロン運営委員には七尾市出身のメンバーや主催者と面識のあるメンバーもあり、富山県も被災していることから今回の会議への支援に力が入りました。

情報共有会議での支援団体等の発言は被災者や被災地の今を語っています。この内容を模造紙にかきながら復旧・復興には大小山ほど課題があることに驚きます。それでも現状や課題を語ることでその内容に係る情報提供があったり、他の支援団体等とつながったりし、この会議の

重要性を実感していました。会議終了後も熱心に情報交換を行っ



ている姿から参加者の復旧・復興への強い思いが伝わってきます。参加者の納得感を引き出し、モチベーションを更に高めるようなこの会議にファシリテーションのチカラを感じていました。今回、能登半島地震からの復旧・復興支援に少しでも関わらせていただいたことに感謝しています。

「能登町情報共有会議」の立ち上げと運営の伴走支援

顔の見える関係づくりから、連携・協働を育むために

能登半島地震後、能登町で活動する被災者・復興支援団体の情報共有や連携を進めるための場「能登町情報共有会議」が開催されています。災害復興委員会では、会議体の立ち上げ支援と初期の運営の支援を実施しました。

立ち上げ準備期から1年たった現在も、被災地の状況に合わせて体制変更を行いながら会議を継続し、被災者支援や復興支援を支える大事な場として機能しています。

支援の経過(2024年)

●3月

- 支援団体のOPENJAPAN、JVOAD等の東日本大震災以降のつながりがある団体から「情報共有会議」の場づくりについての相談・支援依頼の打診が入る。
- 能登町で情報共有の場の設定について話し合う場の支援。事前の打ち合わせや調整を行い、当日はファシリテーター、板書を担当。

●4月

- 能登町で情報共有会議準備会、情報共有会議の支援を行う。会議の運営についての相談やファシリテーションや板書、参加団体との関係づくりの検討、会議後のふりかえりを支援。
- 情報共有会議の運営について現地支援をしているNPO法人パルシックと情報交換を行い、今後の運営について意見交換。



円になり顔が見えるレイアウトで実施

●5月

- 能登町で情報共有会議運営へ出席。実施後ふりかえりを行い今後の改善を検討。
- 能登町で「板書練習会」を実施。情報共有会議運営の実施後ふりかえり支援と今後の会議運営について情報交換。
- その後は伴走支援。会議参加者のSNSグループに参加し、会議運営者と進捗確認と情報交換やふりかえりを実施。

〈今回の支援を通じて感じたことや分かったこと〉

1. 情報共有会議は地域ごとの特性・特徴を反映した場であることが大切であり、その場を運営者が自分たちで状況に合わせて変化させていくことが大事。
2. 過去に災害後の情報共有会議への参加経験がある人・団体は少数であるため、運営者や参加者にとって疑問や悩みも多い。その状況に寄り添い、状況に合わせた工夫について意見交換を続けることが必要。(FAJ災害復興委員会、遠藤智栄)



(左) 支援団体が役割分担しながら、ファシリテーター、板書を担う。(右) 会場は能登町役場の2階会議室。支援団体、役場職員、社協職員が集う



石川県社会福祉協議会

生活支援相談員同士で悩みや想いを共有

2024年12月13日、石川県七尾市、金沢市の2会場にて、石川県内の地域支え合いセンター生活支援相談員の方が参加するワークショップの支援をしました。

生活支援相談員は、能登半島地震で被災した方々の仮設住宅等を訪問し、見守り活動や様々な相談を受け、それを関係機関につなぐなどして生活の自立に向けた支援を行う役割を担っています。普段はオンラインのサロン形式で情報交換等を行っているとのことですが、オンラインだと、相談員さん同士のネットワークづくりや、モチベーションのアップにつながりにくいこともあり、はじめて対面でサロンを開催するにあたり、災害復興委員会に支援の依頼があったものです。

当日は七尾会場で50名超、金沢会場で約30名と多くの方にご参加いただきました。サロン終了時には会場のあちらこちらで参加者同士の「何かあったら電話でおしえてくださいね」といった会話が繰り広げられていたのが印象的でした。(FAJ災害復興委員会、山田真司)



グループに分かれて話し合っている様子

主催者の声から

「ドキドキ顔から自信あふれた笑顔に」

石川県社会福祉協議会
石川県地域支え合いセンター
村田 明日香



能登半島地震後、交通事情が悪く毎月オンラインで開催してきました生活支援相談員の研修を、初めて対面で集う『飛び出せオンラインサロン』として企画しました。

県内19市町の支え合いセンター生活支援相談員は、社協内の介護保険事業から異動した職員や被災し失業されていた住民まで千差万別。そのような背景を考慮し、被災者支援活動の意欲向上を目的とした研修であることを協会の皆さんたちと何度もZoomやメールですり合わせを行い、プログラムを立案していただきました。

①互いのことを知り合う②現状のモヤモヤを吐き出す③これからに向けて語り合うといったテーマでワークショップを行いました。テーブルファシリテーターが進行・記録を担当していただき、相談員はお腹一杯しゃべり尽くせたと大変満足され帰路につきました。

今でもこの研修は伝説のオンラインサロンと語り継がれています。

志賀町 保健福祉課

課題やニーズを聴き取り、専門家に繋げる支援

志賀町での活動は、熊本地震の際に支援した嘉島町の保健師さんが志賀町に対口支援に入ったご縁で始まりました。まず支援先の志賀町健康福祉課で現状や課題を聞き取る中で、庁内連携の進め方や今後始まる地域支えあいセンターと社協との連携が重要な課題だとわかりました。被災者でもある職員同士の対話の場や、他地域からの支援者と話し合い、今後に向けての課題を整理することが主な支援内容です。

平時とは違い、様々な人が支援者として入ってくる中、誰に何を委ねるのかというところの判断も重要で、そのためにこれまでのネットワークを活用して情報提供。先行きが見えない中で行政・社協・支援団体が円滑に連携できるよう、専門家と共にチームづくりを支援できたことはこれまでの積み上げがあったからこそその活動でした。またその一環として、

支えあいセンター運営の準備や、支援団体との話し合いの設定準備や可視化支援、さらに、志賀町居宅介護支援事業所等連絡会では講座とワークショップを実施しました。

常駐はできないもののZoomやLINEグループなども活用し、タイムリーに対応できるようにしました。今後、現地のみならず遠隔でもできる支援も工夫し、継続していきます。(FAJ災害復興委員会、浦山絵里)



他県の支援団体と専門家を交えた打ち合わせ

南相馬市災害ボランティアセンター連携会議を支援 ～平時から備える、災害ボラセンの運営に向けて

南相馬市では、災害時の災害ボランティアセンターの運営に協力する組織・団体との連携会議を年4回実施しています。災害復興委員会では、この連携会議のファシリテーターと板書を担当、支援しました。現在では、連携会議の取り組みに、南相馬市以外の社協からの評価の声をいただくようになりました。

●連携会議の特徴とポイント

1. 行政、社協だけではない多様な団体が平時から連携会議に参画している
2. 南相馬市総合防災訓練と連携して、同じ日に災害ボランティアセンターの設置・立ち上げ訓練ができています
3. 防災・災害関連の人材育成や事業についても連携団体と協働で実施できている

連携会議の主な議題は、主に2つ。防災・災害関連の事業の検討と、災害ボランティアセンターの設置・運営訓練についての協議調整です。団体の繁忙期などを確認した上で、南相馬市の総合防災訓練の開催時期に



情報共有会議の様子

合わせて検討を進めました。

連携会議のファシリテーターとして工夫しているのが、各組織・団体が毎年人事異動がありメンバーが変わる中で、普段から声かけやすい関係性と仕組みづくりを意識・工夫することです。また、連携会議での共有内容を確認し発展させることができるように、ホワイトボードへの板書による見える化を実施。会議では、場合によって前に戻って確認して進行し、噛み合うよう工夫しています。さらには参加者同

士のLINEグループを作ったり、会議後に昼食ランチ会を実施することもあります。

災害は起こってほしくはないものの、万が一南相馬市で災害が起こった場合には、この連携会議の仕組みが動き出すことをイメージして支援を続けていきます。

●連携会議参加団体

- ・ 社会福祉法人南相馬市社会福祉協議会
- ・ 南相馬市役所 危機管理課、社会福祉課社会福祉班
- ・ 一般社団法人原町青年会議所
- ・ 一般社団法人カリタス南相馬
- ・ 特定非営利活動法人オペレーション・ブレスリング・ジャパン
- ・ 特定非営利活動法人日本ファンリテーション協会災害復興委員会 (FAJ災害復興委員会、遠藤智栄)



(左) FAJが板書を行う (右) 南相馬市の総合防災訓練と並行して「災害ボランティアセンター設置訓練」を実施。その振り返りを行った



各地で養成講座や練習会を実施

～平時に備える災害復興支援者のためのファシリテーションスキル

災害復興・防災支援者のための「話し合う力」養成講座

開催日: 2025年2月15日(土)

会 場: 東京ボランティア・市民活動センター

災害支援の現場では、多様な情報を共有し、支援を調整しながら意思決定をする場面が多くあります。「話し合う力」として被災地の話し合いをよりよくすすめるためのスキルと心がけを学ぶ機会として、災害復興や防災支援の現場における「話し合う力」養成講座を開催しました。

2024年1月に発生した能登の地震災害を受け、被災地支援や企業や地域防災への取組意識が高まる中、これまで被災地支援に携わってきた災害復興支援メンバーの経験談や支援活動の内容を伝えながらすすめる臨場感ある1日研修を実施しました。

終日のプログラムを対面で行うことで、災害支援時のファシリテーションマインドや対人支援における表情や感情、距離感などへの配慮などを体感できる演習も行うことができました。

災害支援の話し合いの場では、被災地の声やニーズや意見の集約、多

岐にわたる情報の整理などが行われます。最近は、オンラインやICTなどのコミュニケーションツールも活用が見られます。多様な人たちや団体とチームを組み、被災地の状況にあわせ、さらに被災者の心情に寄り添いながら支援を行います。

被災地における話し合いの場では、以下のような姿勢が求められます。

1. 被災地の状況を理解する。
2. 怒りや戸惑いを受け止める。
3. 地域の力を信じる。
4. 困っている人の背景を考え、寄り添う。
5. 支援者として関わるだけでなく、地域内における話し合う力が定着するよう、先を見据えて関わる。

また、災害復興計画やまちづくり計



災害現場の話もリアルに伝える講座の内容

画、行政の制度や支援情報を事前に把握することの重要性も認識されました。

参加者からは、「リアルな対話の場を体験できたのが貴重だった」「議題づくりの演習は実践的で、多くの気づきを得た」との感想をいただきました。本講座を通じて、ファシリテーションの力を活用しながら、被災地支援の現場に寄り添える仲間が増えてくれたことに力強さを感じました。

(FAJ災害復興委員会、元持幸子)



話し合いを組み立て、合意形成の話し合いを進めた演習

プログラム概要

(1) ファシリテーションと対話の基本(信頼の構築)

被災地における対話への留意点やファシリテーションの重要性についての確認や、災害現場における問いや傾聴場面の演習

(2) 災害復興支援現場での話し合いの準備(傾聴と質問の質)

災害現場の実際の雰囲気や時間的な流れなどを伝え、話し合い議題づくりと情報の見える化や共有についての演習

(3) 合意形成のコツを体験してみよう(合意形成のプロセス)

被災地の話し合いの場では、立場や活動、意見の異なる多様な人たち、情報が飛び交います。模擬的にそのような場面を設定し話し合いを実践する演習

災害復興の現場で、特に支援者に必須なファシリテーションスキルは、「話し合う力」と「板書・見える化」です。

発災前の平時からこのスキルを備えているかが重要です。

災害復興委員会が独自に開発したこれらの体験型の講座を東京と青森で行いました。

災害時の情報共有会議に活かす板書練習会 in 青森

開催日: 2025年3月15日(土)

会 場: アピオ青森

青森県内で防災・被災地支援活動を実施しているFAJ会員と連携し、板書練習会を3月15日に青森市で実施しました。青森県内各地からの参加があり、特に県内の女性防災リーダーの方々に多数参加いただきました。定員を大幅に超える申し込みがあり、急遽定員を増やしての開催になりました。

災害発災後には情報共有の場が大事な役割を果たします。そこでは地域の状況を共有したり、関係者(行政、社協、NPOなど)間で関係者と知り合ったり、現状を確認したり、課題を出し合ったりします。

その情報共有の場で見える化の支援を行うのが「板書」で、今回はその「板書を練習する」ワークショップです。板書のスキルアップと同時に、参加

した人同士でつながり、ネットワークが作られることも目的としています。

練習会では、模擬の情報共有会議が開催されたという設定で板書をしていただきましたが、みなさん非常によくできていました。会議を板書する機会はありませんが、日頃から話し合いを手元メモなどに書きとめることなど、されている方が多く「意外と書ける、情報共有会議でもできるかも」との感想を持たれた方も多かったです。

参加された方の中には夜勤明けの看護師の方もいらして、板書を書くスピードも速く、要約も見事でした。

情報共有会議だけでなく、職場のミーティング、町内の会議での活用、地域防災会議での活用ができそうとの感想もありました。

〈参加された方の声〉

- ・ 多くの人へ情報共有をさせるツールの一つとして広く地域に広めたい。
- ・ 板書の方法だけでなく、その考えなどがわかった。
- ・ 板書は苦手だと思っていましたが、普段のミーティングで克服できそうです。
- ・ 書かないよりは書いたほうがよい！これ名言です！
- ・ みんな、できることがわかった。自分も含めて。
- ・ 12年続いた小中学生地域住民を交えた避難所運営訓練で活用したい。

皆さんの熱意溢れる参加姿勢が素敵でした。とても充実した時間を一緒に過ごさせていただけたことに感謝します。

(FAJ災害復興委員会、野口和裕)



演習では被災地での会議を想定し、FAJ会員がホワイトボードを使って板書した。参加者は机上で板書を実践した

ネイチャーガイドの視点から見る場づくりとは

～災害復興トークカフェを開催

防災や災害復興について最前線で活動している方にざっくばらんにオンラインでお話を聴いて交流するトークカフェ。今年度は、ゲストに小林政文さんをお迎えしてオンラインで12月9日に開催しました。小林政文さんからは「災害復興の場面で、聴くこと、話し合うこと、場を作ることはとても大事。これらを通じて被災者・住民の声を知りチームワークを促進したり、自分のあり方を確認もできる。ファシリテーションはどんな場でも役に立ちます！」等のメッセージをいただきました。また、参加者からの感想には、被災者の声を聞くこ

とから始めたい、被災地での憩いの場や引き際の大事さのヒントをいただいた、住民の動線に入りつながりをつくることは大事だと感じた、等の声をいただきました。(FAJ災害復興委員会、遠藤智栄)

小林政文さん：2004年新潟中越地震発災後からボランティアセンターにて子どもやお年寄りの心のケアを目的にボランティアコーディネーターを経験。能登半島地震ではRQ能登にて現地ボランティアでの活動を行った。主活動は自然体験を通じた環境教育。環境教育指導者を1500人以上育成してきた。所属：ホールアース自然学校沖縄校がじゅまる自然学校、FAJ会員



上、小林政文さん(当日のオンラインの画面より)

YesとNoのカードを使って、楽しみながら防災・備えを考えてみよう

～気軽に体験! 防災対応カードゲーム「クロスロード」

地震や台風など自然災害が頻発している昨今、自分自身の備えや準備が大丈夫か再確認するために、9月13日に防災対応カードゲーム「クロスロード」の体験会を実施しました。参加者の皆さんは楽しみながら自身の防災・備えを考えると同時にゲームのファシリテーターの役割についても深めることができました。また、会の後半には、災害復興委員会の活動報告書を読みながら、FAJの活動について意見交換しました。

参加者の方からは以下のふりかえりコメントが寄せられました。

- ・自分の選択の判断の理由を聞くと、YES、NOが変わる。
- ・それぞれに背景がある。状況も想像しないと簡単に言えないと感じた。
- ・ある程度、そのジャンルに知識がないと判断できないこともある。



真剣な時間、笑顔の時間が交差したワークショップ

- ・聴覚障がい、アレルギーの人など人に気づかれにくい人に対して自分がやれることを見つけていきたい。
- ・久しぶりに参加者としてクロスロードをやってみたが、選ぶ答えはあまり変わらなかった。選択に自分自身が出るのだなと思った。
- ・選択の判断についての意見を言った上で、結論を決めるには実際にはそのあと話し合いが必要だなと思った。

(FAJ災害復興委員会、遠藤智栄)

災害時の地域での話し合いを疑似体験

～各地の定例会で話題提供

2024年度災害復興委員会では、関西・東京・九州の各支部定例会において、「災害時の連携を促すファシリテーション」をテーマにワークショップを実施しました。参加者は5～6名のグループに分かれ、行政職員、社会福祉協議会職員、自治会長、民生委員、ボランティア団体、学生といった、それぞれの役割に合わせた異なる情報が与えられ、その情報をもとに話し合いを進めます。まず、それぞれが持つ情報を持ち寄り、地域の被災状況につい

ての情報を共有し、地域で今何が起きているのかを話し合います。次に、浮かび上がってきた状況から、何が地域の課題なのかを探り、それぞれの立場から見える課題やニーズを想像していきます。そして最後に、私たちにはどんな支援ができるのか、どのように連携すればより効果的な支援につながるかを考えます。こうしたプロセスを通じて、情報の可視化と整理の重要性が明らかになり、そこにファシリテーションの技術が大きな役割を果たすことを感



可視化された情報を一緒に眺めて考える様子

じて頂くことができました。

災害復興委員会では、災害時にスムーズな連携を図るためには、平時から地域に「話し合う力」を育むことが不可欠であると考えており、今後も全国の支部や地域のサロン等で、引き続きこうした取組を広げていく予定です。

(FAJ災害復興委員会、平山猛)

情報共有会議を可視化するという災害支援のカタチ

～板書ボランティア練習会

各支部での定例会に先立ち、午前中に板書ボランティア練習会を開催しました。本練習会は、災害支援に関心があるものの「自分に何ができるのか分からない」という方々を対象に、災害時に被災地で行われる情報共有会議

において、ホワイトボード等を使って内容を可視化・整理する「板書ボランティア」という役割の存在を知っていたが、実際に模擬的に体験してもらうことを目的としています。参加者は、次々に出される情報を書き留めることに苦戦しながらも、被災地での情報共有会議で話し合われる内容に触れることで、支援の一端を担う意義を実感していました。

練習会にはファシリテーション協会の会員だけでなく、災害支援やボラン

ティア活動に関心のある地域の非会員も参加し、異なる立場の人々が交流する貴重な機会にもなりました。こうした地域内のネットワークづくりは、いざというときの連携や協働にもつながると私たちは考えています。

災害復興委員会では今後もこうした練習会を各地で継続し、防災・減災意識の醸成とともに、ファシリテーションを活かした災害支援の輪を広げていきたいと考えています。

(FAJ災害復興委員会、平山猛)



2人組のチームで板書する様子

能登半島地震支援活動に向けたFAJ内募金の報告

2024年4月1日から2025年3月31日まで寄付金の募集を実施しました。いただきました寄付は、合計201,650円でした。多くの方から寄付金をお預かりしましたこと、この場をお借りして御礼申し上げます。

2024年度 活動一覧

※活動会員数 129 人、受益者(会員) 127 人、受益者(一般) 596 人、総計 852 人(いずれも延べ人数)

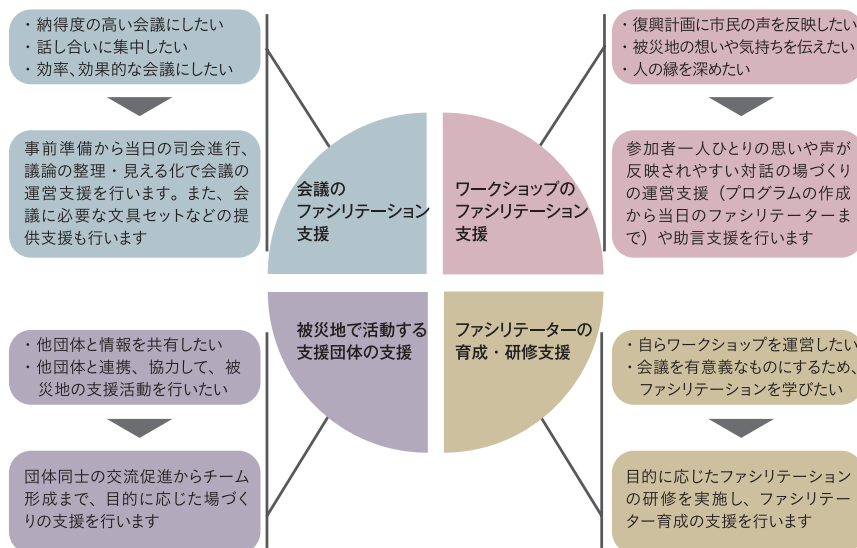
3月28日	能登町情報共有会議準備会(石川県能登町)	7月3日	第11回七尾市情報共有会議(石川県七尾市)
3月29日	志賀町健康福祉課支援(石川県志賀町)	8月22日	南相馬市災害ボランティアセンター連携会議(福島県南相馬市)
4月10日	第5回七尾市情報共有会議(石川県七尾市)	9月14日	富山サロン9月例会話題提供(富山県射水市)
4月11日	能登町情報共有会議準備会(石川県能登町)	9月28日	クロスロード&報告書を読む(東京都渋谷区)
4月23日	志賀町健康福祉課支援(石川県志賀町)	11月23日	東京支部11月定例会話題提供(東京都葛飾区)
4月24日	第6回七尾市情報共有会議(石川県七尾市)	11月23日	板書ボランティア練習会 in 東京(東京都葛飾区)
5月7日	南相馬市災害ボランティアセンター連携会議(福島県南相馬市)	12月6日	南相馬市災害ボランティアセンター連携会議(福島県南相馬市)
5月8日	第7回七尾市情報共有会議(石川県七尾市)	12月9日	トークカフェ(オンライン)
5月9日	能登町情報共有会議準備会(石川県能登町)	12月13日	石川県社協生活支援相談員向けWS(石川県七尾市、金沢市)
5月10日	志賀町健康福祉課支援(石川県志賀町)	1月11日	九州支部1月定例会話題提供(福岡県福岡市)
5月11日	関西支部定例会話題提供(兵庫県西宮市)	1月11日	板書ボランティア練習会 in 福岡(福岡県福岡市)
5月11日	板書ボランティア練習会 in 関西(兵庫県西宮市)	2月15日	災害復興防災支援者のための「話し合う力」養成講座(東京都新宿区)
5月14日	板書ボランティア練習会(オンライン)	2月14日	南相馬市災害ボランティアセンター連携会議(福島県南相馬市)
5月22日	第8回七尾市情報共有会議(石川県七尾市)	3月15日	災害時の情報共有会議に活かす板書練習会 in 青森(青森県青森市)
5月24日	志賀町健康福祉課支援(石川県志賀町)		
6月5日	第9回七尾市情報共有会議(石川県七尾市)		
6月5日	志賀町健康福祉課支援(石川県志賀町)		
6月19日	志賀町健康福祉課支援(石川県志賀町)		
6月19日	第10回七尾市情報共有会議(石川県七尾市)		
7月3日	志賀町健康福祉課支援(石川県志賀町)		

日本ファシリテーション協会と災害復興委員会

ファシリテーション(Facilitation)——、人と人、人とコトとの関わり方に働きかけ、集団による学習や問題解決、未来創造などの場においてプロセスと結果がよりよいものとなるよう支援・促進することを意味します。その役割を担うのがファシリテーターで、話し合いの場で参加と相互作用を促す進行役などがわかりやすい例です。

特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会(FAJ: Facilitators Association of Japan)は、ファシリテーションの普及を通じて、多様な人々が協働しあう自律分散型社会の発展を目指し2003年に法人として設立、2004年には内閣府より特定非営利活動法人(NPO)の認証をうけました。2022年7月現在、1,146名の会員が活躍する団体となっています。

災害復興委員会は、2011年3月11日に東北・関東を襲った地震・津波・原発事故の複合大災害直後にFAJ内に設置され、以後、「地域コミュニティの再構築・住民主体の復興支援」、「支援機関同士のネットワーク強化」を柱に各地で活動しています。



特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会

災害復興委員会 2024年度 活動報告書

2025年6月1日発行

編集 特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会 災害復興委員会

浅羽雄介、浦山絵里、遠藤智栄、遠藤紀子、小栗由香、杉村郁雄、野口和裕、疋田恵子、平山猛、元持幸子、山田真司

発行 特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会 東京都渋谷区千駄ヶ谷三丁目12番8号 www.faj.or.jp

お問い合わせ(Eメール) fukkou311@faj.or.jp

本書記載の記事・写真・図版等を無断で商用印刷物等に転用することを禁じます